

## ある闘争

金融アナリスト

永山卓矢

— 日本の新型コロナ問題の真実 —

## 【動かぬ日本が生み出すある危険】

株価が高騰している。その原動力になっているのは、新型コロナ禍を受けてトランプ政権が矢継ぎ早に財政出動政策を打ち出したのに歩調を合わせて、F R Bが超大規模な金融緩和策を打ち出している事だ。

2～3月に株価が大暴落したのを受けて、F R Bは迅速に政策金利をゼロ金利に引き下げ、更に無制限に資産購入を推進した。その結果、F R Bの総資産は一気に日銀を抜いて史上最大になっただけでなく、国債を800億ドル、住宅ローン担保証券(MBS)を400億ドルと、最低でも毎月1,200億ドルもの資産を買入れている事になっている。それ以外にも他の資産担保証券(ABS)や社債も購入していく事になっている。

多くの識者は、米国始め先進国の経済実態は経済活動を再開させた事で回復しているものの、新型コロナ禍に襲われる以前の状態には程遠い中で、株価は上がり過ぎており、いずれ急落する事が避けられないと見ているようだ。ただ留意する必要があるのは、株価は実体経済の先行指標であって遅行指標ではない事だ。これから資産価格が高騰していく事により、家計の消費意欲が喚起されていく事で、米国経済は回復傾向を強めていくのだろう。

とはいえ、いかに米国は基軸通貨国であるとはいえ、世界でも圧倒的な貯蓄不足国(債務大国)が政府部門の財政赤字や中央銀行の総資産を飛躍的に膨張させている事で、将来的にドル不安に陥る懸念が拭えない。これまで、F R Bが大規模な金融緩和策を推進した際には、必ず世界でも群を抜く貯蓄超過国(債権大国)である日本の日銀にそれ以上の緩和策をさせる事で、ドル不安に陥るのを回避してきた。1987年10月19日に株価が暴落した際には、日銀が当時の政策金利である公定歩合を2.5%と超低水準に引き下げた事で日本ではバブル経済化が醸成された。

また2000年代前半には、F R Bは政策金利をインフレ率を下回る水準に引き下げたが、当時も日銀が当座預金残高を30兆～35兆円まで積み上げる事で量的緩和策が強化された事からドル不安に陥らなかった。日本が圧倒的な原油輸出大国であるサウジアラビアと共に、米国が世界覇権を維持していく上で中核的な属国と言われる所以である。

ところが今回は、日銀は国債購入額の上限を撤廃したものの、買入れる国債がないために量的緩和策を強化出来る状況にはない。安倍政権は「史上最大規模」と銘打った財政出動政策を、補正予算を2回組んで実施したものの、米トランプ政権が打ち出したものに比べるとかなり小規模なものに過ぎない。

おそらく、親イスラエル左派的で社会主義的、リベラル的なコスモポリタン志向で米国の世界覇権の維持を望んでいる米軍産複合体の直系であるグループ・オブ・サーティ(G30)の意向を受けて、日銀の黒田総裁はできる限り量的緩和策を強化したいと思っているのだろう。しかし、トランプ大統領と共にその背後に親イスラエル右派的で国家主義的、民族主義的なナチズム系の権力者層が背後に控えている安倍首相が、自身の体調が優れない事も利用しながら、全く臨時国会を開会して動く気配を見せないため、日銀がこれ以上、量的緩和策を強化出来ないのである。

## 【新型コロナのもう一つの目的】

これまで当欄で述べたが、遺伝子操作により誕生した生物兵器である新型コロナウィルスが投入された目的は幾つかある。ただその中で最も重要なのは、中国との間でデカップリング(分断)化を推進する事であろう。

ただそこにも、安全保障面と経済・通商面での二つの意義がある。まず経済・通商面では、中国沿海部を生産工場に据える事でサプライチェーンの中核とするグローバル生産体制を崩壊させる事である。

それによって米政府は渡航禁止措置を打ち出した。そうする事で、米多国籍企業は生産拠点をほぼ米国内に回帰しているか他の地域にシフトしている。

安全保障面では中国との間で「新冷戦」構造を構築する事であり、それは新型コロナ禍により米中間の対立が一段と激化しているのに見られる通りだ。新型コロナへの対応を巡り、中国では発生地である武漢を強制的に封鎖して感染を抑え込んだ中で、習近平国家主席は全体主義的な共産党独裁体制の優位性を主張したのに対し、トランプ大統領始め米国側は独裁体制による隠蔽体質が初動を遅らせて世界的にウイルスを蔓延させたとして非難したものだ。

今回、新型コロナウィルスが投下されたもう一つの大きな目的として、将来的に米ドル基軸通貨体制を動揺させる事で米国の覇権を弱体化させる事を付け加える必要がある。

トランプ政権が矢継ぎ早に大規模な財政出動政策を打ち出し、それに応じてF R Bも強力に金融緩和策に動いているのも、それと対照的に安倍政権がこれ以上、追加対策に動かないのも、両首脳背後に米国の覇権を弱体化させようとしているナチズム系の権力者層がいる事を考えれば得心がいくというものだ。

この新型コロナの投入は、ナチズム系の中でもキッシンジャー元国務長官の路線に反対している勢力が、最先端の遺伝子操作の化学技術を有する米軍産複合体の勢力と提携する事でもたらされたものだ。米中貿易戦争の時もそうだったが、ナチズム系と軍産系は表向き中国を攻撃する事で一致しているものの、最終的な目的意識が異なる「同床異夢」の関係にある。軍産系は米国の覇権を維持するために中国を撃滅しようとしているのに対し、ナチズム系は将来的に中国に覇権を明け渡すにあたり、その過渡期の形態として巨大な軍需を創出するために中国との間で「新冷戦」体制を構築し、「ヤラセ」の軍拡競争を繰り広げようとしている。

## 【日本で繰り広げられる闘争】

そこで今回、注目する必要があるのが日本に対する姿勢である。

軍産系としてはドル基軸通貨体制を維持するためには、日銀がさらに強力な量的緩和策を推進出来るように日本政府に追加的な財政出動政策を実施させる必要がある。そこで軍産系が多くの主力メディアや報道機関を押さえている中で、ゲスト出演している専門家や識者は新型コロナの脅威を煽る悲観論者だけで占められており、必要以上に高齢者を中心に悲観的な雰囲気煽られていく。本当は新型コロナの重症化率や致死率は季節性インフルエンザとそれ程変わらず、経済活動の自粛に反対して集団免疫路線の推進を主張している専門家が登壇する事は殆どない。

政治家レベルでも、米軍産系につらなる小泉元首相の系列である小池知事が率先して感染対策を強化し、東京都の経済活動を停止させようとしている。これに対し、新型コロナに対する誤った認識が一般化しており、高齢者を中心に恐怖心が強まっている中で、ナチズム系が背後に控えている安倍首相はじめ官邸の勢力は一般論者から「無為無策」と批判されながらも、特に表立った政策を打ち出さない事で密かに集団免疫路線を推進している。

観光業界への支援を目的としている「Go Toキャンペーン」が実施されているのは、その業界から献金を受けている二階幹事長の意向によるものだが、官邸はそれを集団免疫路線の一環として全国的に感染を拡大させる手段として利用しているようだ。

いわば、米権力者層の間ではナチズム系と軍産系による暗闘劇が行われている中で、将来的なドル基軸通貨体制の存続を占うドル不安の到来を巡り、足元の日本で重大な闘争劇が繰り広げられている訳だ。私たちは連日、主要メディア・報道機関で放映されている事で、意図的に必要以上に煽られている新型コロナに対する恐怖心や悲観論に惑わされないようにしなければならない。

永山卓矢の「マスコミが触れない国際金融経済情勢の真実」

<http://17894176.blog.fc2.com/>

# ガデウニカル 次のステップアップへ

先週の日経平均株価は2月21～25日のギャップダウン(23,378～22,950)に阻まれながらも、トライアングル上抜け時のギャップ22,874～23,111は辛うじて引け値(20日22,880)で維持している。相場はギャップとギャップの狭間で苦闘しているが、まさに「前門の虎、後門の狼」といった状況。

チャートのトライアングル系の調整がレクタングルへと転じる可能性はあるが、今週どちらかのギャップを引け値で埋める動きが日経平均の目先の方向性を示唆するだろう。

先週の波動カウントが正しければ、この調整後は上放れを実現させると予想される。その目標値24,916±378に変更はない。前々回だが大局観で見た4年サイクルの目標はさらなる上値になる。即ち「この場合、現行4年サイクルの目標値は単純に前4年サイクルの上昇幅の1.618倍を現行4年サイクルの起点から加算すれば31,865±1,130」。

この強気シナリオは15カ月移動平均を下回るまでは有効であり、その天井は2022年9月～23年3月に出現するとの考

え方も依然として有効だ。トライアングル内に回帰すると調整の時間は更に1カ月ほど長引く恐れがある。しかし強気シナリオはトライアングルを下抜け(21,500以下)ない限り有効である。なお、23,500以上の動きはトレンド再開のシグナルになりそうだ。特にこのレベルでギャップアップがあればなおさら確信が持てる



## 投資家Sの 今週の注目銘柄

### ファイバーゲート

ファイバーゲート【9450】は2018年に東証マザーズ上場。そこから僅か1年で東証1部へ鞍替え上場した成長著しい企業。提供商品を一言で表すとWi-Fi(公衆無線LAN)となる。

2000年の会社設立から一貫して集合住宅の通信を手掛け、直近5年は集合住宅向けのレジデンスWi-Fiと商業施設・観光施設向けのフリーWi-Fiの設置で業績を伸ばしている。8月18日に行われた決算説明会に出席する為、本社がある札幌まで足を運んだがその価値は充分にあった。当社のビジネスは、Wi-Fiの使用料というストック型の収益と、Wi-Fi工事敷設時に設置を行う通信機器販売の二本立てとなる。今回のコロナ禍においてリモートワークを始めた方も多いと思うが、リモートワークを行うのに必須となる環境は2つ。それはパソコンとネット回線(Wi-Fi)である。パソコンは会社支給のノートPCを持ち帰って仕事は出来るが、問題は通信回線である。仕事で使用する通信回線となるとデータのやり取りも多く、ポケッ

トWi-Fiでは限界があるのも事実であり、筆者も5月にWi-Fi回線の増強を実施してリモートワーク環境の改善に取り組んでいた。当社のレジデンスWi-Fiは、withコロナ時代に極めてマッチしており、事実、2020年6月期4Qの業績も減速しておらず、成長を継続している。問題は、インバウンド顧客の増加を背景として拡大していたフリーWi-Fi事業であり、こちらは4Qの新規案件がほぼ”ゼロ”となった事を会社側が認めており、好悪の材料が入り混じっている状況である。当社は、社長とその資産管理会社が50%以上の株式を保有する、いわゆるオーナー社長が経営する会社であるが、社長の猪又氏の説明は非常に興味深かった。同社長の話では、日本全国で通勤交通費が発生している人口を約4,000万人と見積もっており、平均1万円の交通費がリモートワークによって不要になった仮定とすると、4.8兆円の新しい市場が生まれる事になる。通常1兆円を超える市場が出来上がるには、10年以上の歳月を必要とするが、コロナでリモートワークの流れが加速しており、猛烈なスピードで巨大市場が出来上がりつつあるという事だ。移動を生業とする鉄道・航空等の運輸各社の業績は非常に厳しい内容となっており、移動⇒通信への“費用移転”が起こっているように見える。

当社の売上はまだ100億円程度であり、上記新市場の1%を獲得出来れば、売上はざっと現在の5倍となり、株価もまだまだ上昇の余地が。市場の期待も高く、PERは40倍台後半となっており、将来の大幅な成長を織り込む株価となっている。

2010年代の通信はスマホに代表される移動通信が隆盛を極めたが、“集合住宅向け無線通信”という、“少し古くて新しい”分野にも成長の余地はまだまだありそうである。成長の“門”は常に開かれている—という事を実感させてくれる銘柄である。



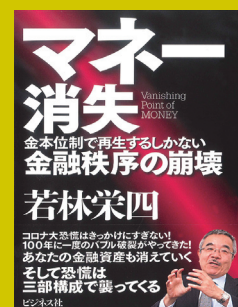
## 金本位制で再生するしかない 金融秩序の崩壊

Vanishing Point of MONEY

# マネー消失

最新刊

若林栄四



ビジネス社  
四六判 並製 244頁  
定価 本体 1,500円(税別)

2023年まで続く  
世界全面ドル安株安の時代を  
どう生き抜くのか?

■主な目次  
第1章 アメリカはすでに恐慌状態に陥った!  
第2章 強すぎたドルがいつに潤滑する日  
第3章 救いようのない日本経済のゆくえ  
第4章 没落する資源国  
第5章 不毛の米大統領選  
第6章 経済的なびしろのない中国の限界  
最終章 相場についての考察



## 今週の九星★波動

南雲 紫蘭

今は見極める時

無敵と思われた米株の上昇ですが、ここへ来て気掛かりなニュースが。米国でのコロナ禍の終息が未だに見えて来ないという事もあります。3月頃買っていたインサイダー、つまり企業の内部関係者の売りが出ている—というのです。

彼らインサイダーである企業の幹部や役員らは底値を付けた3月に自社株を買ったのですが、今や多くが売りに転じているというもの。調査会社ワシントン・サービスがまとめたデータでは、7月は約千人の内部関係者が保有する自社株を売却、新たに購入した内部関係者の5倍に上ったといいます。

内部関係者の買いに対する売りの比率が過去30年間でこれ以上に高かったのは2回しかありません。インサイダー取引の分析を手掛けるインサイダーインサイツ・ドット・コム（[insiderinsights.com](http://insiderinsights.com)）のデータも、同様の傾向を示しています。

## 相場指南道場

## トレーダーあすなろ物語 (555)

中原 駿

総資産営業—現在の銀行でもいわれている常套句であるが、この頃の総資産営業はかなり癖悪いものだった。

キーワードは上昇する「土地神話」。戦後、ごく一時期を除くと日本の土地が下がったことはなかった。

不動産が値下がりしない—という神話が出来上がっていた。

実は田中角栄首相の列島改造は日本全国に大きな傷跡を残しており、特に「市街化調整区域」が外される、あるいは大幅に変更される—という実体のない情報を信じた多くのデベロッパーとそれに群がっていた不動産関係者、並びに金融機関は大きな痛手を被っていた。

特に大規模再開発プロジェクトの多くが石油ショックとともに

## 第六感のドル下落有利の展開



テクニカルアナリスト 葛城 北斗

## ダブルボトムが視野に入る

ドル円相場は今年2～3月の動き以外では小康状態に入っているが、全体像を見ると、高値が切り下がる典型的な弱気相場といえる。

これまで述べてきたようにドル円相場の5年サイクルが天井を打って下降トレンド形成に入っているとすれば、ボトムを打つまで—予想では2021年6月に向けて—下げ続けるのがサイクル理論の定石。ただオーブ（許容範囲）がサイクル期間の6分の1の時間が設定されるため、5年となれば前後に10カ月の幅が出てくるので、ピンポイントでボトムの時間を特定するのは難しい。これには様々なボトム打ちのフォーメーション、そして5年より短いサイクルを吟味して決めていくしかないが、今言えることは、5年サイクルはまだボトムを付ける時間帯ではないということだ。したがって基本のトレードはドルの戻り売りとなる。

先週は「5年サイクルボトムに向けた下降期に入っていると想定しての取引になるが、目先の反発は何らかの小サイクルがボトムを付けた可能性を示唆している。長期シナリオには変更はないが、7～11週サブサイクルがボトムを付けたとなれば、目先1～3週の反発はあり得る。しかしこの戻りはまた絶好の売り場になろう」と述べた。7月31日に104.17の安値を付

過去4週間で内部関係者の売りがあった企業は買いがあった企業の18.6%に達したというのです。この数値が200%に接近すると、相場は短期的な天井を付ける傾向が過去10年では見られています。相場は少なくとも企業関係者からは天井圏あるいは天井圏に近い—という事なのでしょう。

さて、月盤の九星高下伝は《二黒土星》の中盤に入っていきます。月盤が反転していないとすれば、弱保合の中急落も起こりえる危険な時間帯です。値ごる感に惚れて買いたくなる所ですが、要注意です。逆に、上昇基調の場合は月盤の反転間違いなし—として押し目買い一貫でしょう。

8月24日	8月25日	8月26日	8月27日	8月28日
月（一白水星）	火（九紫火星）	水（八白土星）	木（七赤金星）	金（六白金星）
陰極	寄りに戻る	後場急変	存外上昇	前後相反

に頓挫し、金融機関は兆円レベルの不良資産を抱えていたのだった。

それでも、首都圏や三大都市圏のプロジェクトは10年程度で簿価レベルには戻したのだが、それ以外の地方都市の不動産は悲惨だった。原価どころか、半値八掛けに近い水準だった。

不動産が、である。その意味では土地神話というのは既に地方では崩壊しつつあった。

土地神話が有効だったのは、74年以降の列島改造の傷跡を冷静に判断すれば、首都圏—あるいは三大都市圏のみ—とってよかった。高度成長期の熱狂が終わりを遂げたのが石油ショックと列島改造の失敗だったとすれば、日本の土地神話に決定的な終わりを告げたのがバブル崩壊だった。

だが、そのバブル崩壊に向かう道筋で多くの金融機関が総資産営業の名のもとに狂騒に駆られていったのである。

けた後、2週間反発して8月13日に107.05を付けた相場は、現在105円台へと下落している。小サイクル、即ち7～11週サブサイクルが7月31日から始まっているとすれば、天井を付けたことを示唆する。したがって9月中旬移行までボトムを付けない。それまでは下降トレンドを形成するとのシナリオが構築できる。ただし、7月31日がサブサイクルのボトムであったことが前提だが、これがまだ確認できていない。その前のボトムが6月23日の106.06であり、7月31日の安値は5週目。ボトムを付けるには早すぎる。それが短縮サイクルボトムでなければ、今週は9週目となる。このケースでは今後2週間以内に104.17以下に下落してボトムを付ける必要がある（1）。一方で7月31日がボトムなら今週は4週目。これも天井を付けたとすれば、下げ余地はまだかなり残されている（2）。

現在言えるのは、どちらであつても、目先はドル下落有利、そして（1）なら104.17をテストしてダブルボトムか若干下抜ける程度でサブサイクルがボトムを付ける。（2）なら時間がまだ十分にあることから下落幅をさらに拡大させる可能性がある。

現段階では（1）のシナリオを想定し、7月31日の安値近辺でダブルボトムを付けると見ている。

先週のストラテジーでは「ボトムを付け現在2～3週の上昇期に入っている可能性はあるが、それも間もなく天井を打って下降期に入ると見る。106～107円台は売りを狙いたい」。105円台は一部利食いしておき、残りは104円台を狙いたい。なお107円を超える引け値ではショートは逃げておく。

## メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

## 今週からは金星トランスレーションも

振り返って見ると、日経平均株価の直近の高値は8月14日。これは恐らく15日の天王星逆行と何らかの関連性を有しているのかも知れない。同時にこれは火星と「山羊座のステリウム」を構成する3惑星とのスクエア（90度）とも関連している可能性がある。先ず火星は8月4日に木星とスクエアの関係になったが、この相場が直近の安値をつけたのが2営業日前の7月31日、先述の14日高値の前日に火星・冥王星スクエアが出現している。もしそうであれば24日の火星・土星スクエア±2～3営業日の時間帯は大小を問わず日経平均株価にとって何らかの反転ポイントになる可能性がある。なお最新の「MMA日経週報」によると、8月24日～9月17日までの間に14もの強力なジオコスミックシグナルが連なっている（これをクラスターと呼ぶ）点に注目していた。そのトップバッテリーが火星・土星スクエアという事になる。

## 今週の必読押し

## 分水嶺に入る

当欄では基本的にユーロ／ドルの買いを推奨。実際、相場は先週18日に1.1964まで上昇して年初来高値を更新している。しかし、15日スローストキャスティクスは依然として7月水準を上回る事が出来ず弱気オシレーターダイバージェンスが発生。先週の当欄では“6日高値を試すか上回る可能性は若干残されているものの、既に3月末の安値から20週以上経過しており、目先の上げの日柄は既に満ちている。恐らく7月31日と8月6日の高値で形成されたダブルトップ、あるいは先週か今週の高値も加えたトリプルトップの形で修正局面に入る”と予測。また8月3日と12日の安値を結んだネックラインの存在を指摘。割り込んだ時点で1～6週間の修正場面が出現する可能性を示した。ただし、その一方で先週は“このネックラインが有効なサポートになっている可能性がある。もしそうであれば、恐らく今週中に8月6日の高値を上回るだろう。その時は目と瞑って買い。1.2000～1.2400の何処かで利食いの

## WEBサイトより一足早く、1週間分まとめ読み！！

## 今週のアストロロジー info

- 8月24日（月） 今週で火星の山羊座ステリウム終了
- 8月25日（火） 火星／土星スクエア 激震第三弾
- 8月26日（水） マド開け動きに警戒
- 8月27日（木） 小動きに終始
- 8月28日（金） 水は方円の器に随う
- 8月29日（土） 試し玉後、二の矢、三の矢が放てるかが重要
- 8月30日（日） 週明け流れが変わるか注目

このクラスターの中には、当然9日（日本時間10日）の火星逆行も含まれている。火星に関しては先週の当欄でもこう述べていた“火星は現在牡羊座に入居しており、来月9日には逆行を開始。牡羊座は火星が支配する惑星サインなので、実家に戻っている感じーと表現すればよいだろうか。通常よりも影響力が強くなる。また、火星逆行は本年11月まで続くので、その影響で来年1月まで火星は牡羊座に滞在。その間あと2回、山羊座のステリウムの3惑星とスクエアを形成する。それは、現段階で上下どちらかは判らないものの、大きな相場変動が出現する可能性を示唆する”。

このように、強力な天体位相を交点速度が“早い”惑星がなぞる状態の事を「トランスレーション」と呼ぶ、上記の「火星トランスレーション」は10月に再出現するが、その前に「金星トランスレーション」が出現。具体的には25日（日本時間26日）に木星、30日に冥王星、9月2日に土星と、金星はそれぞれオポジション（180度）の関係になる。従って今週は、銘柄を問わず週初と週末、更に来週頭の相場反転に注意する必要がある。

算段をしたい”とも述べた。従って18日の時点で買い参入したトレードもいたかも知れない。

ストキャスティクスは%Kが49.87で%Dが63.08でニューラルゾーン。これは、現在1.1715付近に位置しているネックライン、更に23日移動平均が有力なサポートになっている可能性を示唆。特に前者の水準が引け値で割り込まれない限り、再度反騰して1.2000付近まで上昇して行く可能性が考えられる。従って今週は1.1715以下の引け値にストップロスを入れて買い方針を踏襲したい。

逆に今週ネックラインを引け値で割り込んだ場合、9月下旬までに最低でも1.1580～1.1600、通常で1.1500、オーバーシュートで1.1420～1.1470付近までの修正安があるように思われる。ただそれは3月からの上げ相場における修正安に過ぎず、これが終わるとそこから1.2500付近に向けて反騰する公算が高い。従って、先週買い参入したトレードの中で上記の修正ポイントまでの下げに耐えられるなら保有しても良い。しかし、耐えきれないならネックライン割れで損切りをし、再度ネックラインを上回った所で再度買い参入する事を推奨する。



## 今週の相場風林語録

## 運勢達観（3）

…泰平も戦乱も、繁栄も衰落も、人間社会に避けられない流動で、相場の損得にしてもそれは同じである。このことをしっかりわきまえておれば、焦ったり、怒ったり、絶望したりしない。またの機会に力をためていくことになる。

伝説の雑誌、伝説の連載が全3巻の電子書籍で復活！！

Kindle版  
amazonにて  
お求めください

https://www.amazon.co.jp

その相場手法、自分と  
じっくり比べてみる？ 第2巻  
日経平均とチャートパターン②と  
日経平均とチャートパターン①と

1977～2005年まで発行され、公官庁の実務者クラスや、実際に取引に従事する現役商社マン、株式、為替、債券の各ディーラー、そして百戦錬磨の投資家等々、各方面の第一線で活躍するプロフェッショナル達が執筆陣に名を連ねた伝説の雑誌『商品先物市場』。

この雑誌で連載されていた「短期売買100の法則」では、短期売買を行う上で「何が必要で、何が不必要なのか」を具体的に解き明かしました。その第2巻は、第1巻で解説した「ローソク足とチャートパターン」の続きと、相場サイクルとトレンドの判定についての解説になります。出版直前にコロナ禍による世界的な株式が崩落。書きおろしの序文も入ります。

●Kindle価格：1,214円

投資日報出版 株103-0013 東京都中央区日本橋人形町3-12-11 GRANDE人形町6階 電話:03-3669-0278 FAX:03-3669-4444 http://www.toushinipou.co.jp/